

Title	感想8(東京夏の学校に参加して)
Author(s)	西川, 恭治; 渡部, 三雄
Citation	物性研究 (1966), 5(5): 363-365
Issue Date	1966-02-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/85847">http://hdl.handle.net/2433/85847</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

費や科研費からやりくりして参加することを考えれば、また今後期間が長くなる様なことになれば無視できない問題である。

今回二つのほとんど独立な instituteが第一週、第二週として開かれたことは、京都会議と絡んで新聞に取上げられたことも関連してあまり愉快でない印象が残った。京都と大磯との集りがそれぞれ特徴ある性格を持ち、よい interaction が得られたと考える精神を生かせば、この二つも別々の行事でも構わなかつたわけで、その場合に増える主として事務上の雑用がそう多くなければ独立な企画とした方が、動機だけでなく、結果にもある程度の責任を持った準備運営ができるのではないだろうか。

これからも夏の学校は機会があれば出席したいが、収容人員が限られる様な場合には、会の趣旨などを考慮した上で遠慮する心構えも必要であろう。自分が申込むことは、多分、年下の応募者を一人押しのけることになるであろうから。

## 感 想 8

西 川 恭 治 (京大理)

渡 部 三 雄 (東北大理)

今回の Institute の主な目的は日本と外国の第一線研究者の間の直接的学問的交流にあつたと思う。その意味で、今回の Institute は大変有効であつたと思うし、その組織運営に当られた方々の御努力、御苦勞には深く感謝している。そして今後ともこの種の研究会がいろいろな形で行なわれる事を望み、そのために、我々もできうる限りのお手伝いをさせていただきたいと願っている。

こう書くと、我々が反省会の席上でのべた若手批判的な意見を思い出される方があると思う。我々はあの席上での我々の態度が甚だ不適當で、そのために多くの苦言を招いた事を後悔している。しかし同時に、我々は、我々の発言内容が必ずしも見当違いではなかつたと思うので、改めてここにそれをくり返したいと思う。

第一に、我々は参加者の構成をもつと若い人本位にする事ができるのではないかと思う。元来、多額の勞力を払つてこの様な Institute を持つた理

## 東京夏の学校の感想

由は、国際会議や夏季学校を通して外国の第一線研究者と接する機会の少ない日本の若手研究者のためであつたと思う。従つて、参加者の構成も、地方の研究者や助手、大学院クラスが中心になるものと我々は予期していた。しかし、現実には大部分が30代、40代の第一線研究者（それも外遊経験者が多かつた）であつた。確かに、第一線研究者も外国の研究者と接する機会が充分あるとは云えない。そして今回の講義内容からすれば、参加者の構成は妥当であつたかもしれない。しかし、講義内容は参加者の構成に応じて変えるものである。そこで我々が第二に考えるのは、講演者の数もテーマももつとしぼつて、少数の人にかなり初歩的な処から第一線の研究に至るまでの話を、時間をかけて、分り易く話してもらふ事である。我々の感じでは、そういう話を得意とする人は外国の研究者に特に多い様に思う。そしてそういう話の中には殆んど常に特定の問題に対する独得の学問的姿勢がにじみ出ている様に思う。日本の若手研究者が、毎年そういう講義を聞く機会がえられれば、それは、直接の学問的成果とは異なる意味で、大変有効なのではないかと思う。講義と平行して、第一線の研究内容についての討論を目的とした Informal meeting を聞く事は、重要であると思う。しかし、informal meeting を本当に生かすためには、テーマを講義と関連した話題にしぼつた方がよいのではないか。それにより、自由な討論の時間的余裕もできるし、又、外人講師も含めて全員が興味をもつて参加できる様に思われる。第三に、我々は今回に関する限り、宿舍が立派すぎた割に勉強条件が整なわなかつた様に思う。この問題は実は、第一、第二の問題とも関連して来るのだが、若手の教育を主とした Institute であるならば、宿舍も勉強する場所として考えるべきで、例えば泊る場所は大部屋でもよいから、講義に関係のある書籍や文献、新しい雑誌等を備えた自習室が一つ作られるとよいと思う。

以上三点は、いずれも若い研究者の教育を主とした学校的な Institute を頭に浮べての見解である。しかし、卒直な処我々には、その方が今回の様な半研究会的なものより望ましいと断定する事は出来ない。唯、我々は、この種の Institute を今後持続的行なうとすれば、長い眼で見て学校的なものの方が成果が蓄積されて行くのではないかと思うのである。又実際に組織運営して行く上でも、費用、テーマの選択等でやり易いのではないだろうか。

費用の問題が出たので最後に若手から出ている批判についての私の見解を述べよう。我々は、一部の人々が云う様に、直接ヒモがつかなければどんな財源でも使つてかまわないとは思わない。過去の様々な実績や政治的背景から推して、我々はアジア財団の資金を使用する事を好ましくないと思う。問題は、財源のもたらす弊害と、今回の様な Institute を行なう事の学問的利益と、いずれがより重要かという判断にあると思う。そして我々の判断はどちらかと云えば若手の判断に近いと云えよう。にもかかわらず我々が参加したのは、我々一人一人が、形の上では独立した物理屋でありながら、実質的には 30 代、40 代の第一線研究者がリードする日本の物性物理学の大きな流れの中の一滴にすぎないという弱味を持つていないかと思う。我々が述べたいのは、Institute の意義を認め、そしてそれに出席したがつている人が、何かの後めたい気持を持たねばならない様な財源は、極力避けて欲しいという事である。

若手が提起している第二の問題、即ち運営を公的機関に移すようにという問題についても、我々は若手とほぼ同じ意見である。年会の Informal meeting で意見として出された事だが、日本の現状ではこの種の Institute をいくつも平行して行なう事は実質的に不可能である。その様な場合、Institute を少しでも多くの同業者の利益と合致する様に運営する事が望まれ、それには何らかの公的機関に運営を移す事が望ましいと思う。実際、アメリカは別として、筆者の中の一人が出席したカナダ及びオランダの夏季学校はいずれも公的又は半公的機関<sup>\*)</sup>によつて中小大学も含めた全物理学者の要望を尊重して運営されていた。今後の問題として、学問的理由以外の事で参加したくない人が生じない様に充分配慮していただくと共に、漸時公的機関に運営を移して行く事を希望する。

---

\*) カナダは Theoretical Physics Division of the Canadian Association of Physics の主催で  
オランダは Netherlands Universities Foundation for International Co-operation の主催であつた。